

厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）

分担研究報告書

前頭側頭葉変性症の BPSD の発現機序の解明と治療法の開発に関する研究

研究分担者 谷向 知

愛媛大学大学院医学系研究科精神神経医学講座 准教授

研究要旨

研究目的: 在宅や施設での対応に苦慮する FTLD の BPSD に対する治療-介護ガイドラインを作成するため、進行期の食行動異常を呈する症例に対し、神経心理学的行動分析から BPSD への対処法について検討する。

研究方法: 在宅で介護中の症例と認知症治療病棟に入院中で、ともに口唇傾向にもとづく食行動異常が出現している症例に対し、1)学習ドリルを用いた誘導、2)配膳・配食方法の修正により対応を試みた。

結果: 1)夜間に冷蔵庫の中身を食べ漁る BPSD の出現時に、ドリルを用いた誘導により速やかに再就床に成功した。2)食事場所、配膳、配食方法を段階的に工夫することで盗食・掻き込み等の危険な食行動を防止し、適応的な食事習慣を獲得できた。

まとめ: 進行期の FTLD の食行動異常に対し、BPSD を誘発する刺激を避け、常同行動やその学習能力の高さを利用した介入方法により、新たな適応的習慣を形成し対応することが可能であった。

研究協力者氏名・所属施設名及び職名

小森憲治郎 財団新居浜病院 臨床心理科長

A. 研究目的

前頭側頭葉変性症(FTLD)は、四大認知症の中で、必ずしも高い頻度で現れる疾患ではないが、比較的若年の発症例が多いことや、BPSDの出現が比較的早期から激しいにもかかわらず、治療法の確立されていないなど、病態の解明と同時に対策が求められている疾患である。目下厚生労働省が推進する地域・在宅における認知症者の見守りを継続する上で、FTLD例への対応策は喫緊の課題と考えられる。一方FTLDでは、保たれた能力や行動特性に注目し新たな適応的行動の学習能力があることも報告されている(池田ら, 1995; Tanabe et al, 1999)。本研究ではコミュニケーション能力低下と特有のBPSDにより、在宅や施設でのQOL低下への対策に苦慮するFTLD例に対し、神経心理学的特性に基づいた介入法を確立し、QOLの高い在宅生活の継続に向けて、標準的な治療-介護ガイドラインを作成することを目指す。今回生活上、もっとも苦慮することの多い、進行期の口唇傾向への対応法について詳細な検討を試みる。

B. 研究方法

口唇傾向の出現により在宅介護と入院療養中に困難を来したそれぞれの症例に対し介入を試みた。在宅症例では、昼夜覚醒リズム障害と合併し、夜間に食べ漁り傾向のある症例に対し、主介護者による単語学習ドリルを用いた一連の誘導を試みた。一方入院中の集団給食場で発生した盗食・掻き込みなどの危険な摂食BPSDに対し、作業療法士が個別で段階的な給仕方法を考案することにより、適応的な食事行動の習得を目指した。

(倫理面への配慮)

患者の匿名性に配慮し、個人情報や患者との言語コミュニケーションを図ることは、困難であるため、主介護者から同意を得て、本研究の趣旨を説明し、インフォームドコンセントを書面により交わし、承諾を得た上で実施した。

C. 研究結果

1) 在宅症例については、主介護者である妻の発案で、病初期より患者本人が熱心に取り組んでいる学習ドリルを利用し、夜間に冷蔵庫の中身を食べ漁るBPSDの出現時に、「着替え 軽食 ドリル 着替え ベッド誘導」という一連の行為誘導を試みたところ、30分以内に再就床に成功し、軽食を緑茶に変更しても同様の再就床に導くことができた(小森ら, 第37回日本神経心理学会総会:札幌, 2013)。

2) 認知症治療病棟に入院中、異食・盗食・掻き込みなどの危険な食行動のBPSDに対し、立ち去り・盗食を誘発する刺激を遠ざけ、配食方法や手順を段階的に修正する方法により、安全で満足度の高い食事行動が獲得され、通常の配膳に戻した後にも、一旦獲得した適応的な食行動が維持された(原ら, in submission)。

D. 考察

FTLDの特性に着目すると、意味記憶障害などに由来するコミュニケーション障害が重

度化するに従って、特有の固執的な常同行動が顕著となる。また進行期の FTLD に共通の口唇傾向は、刺激に誘発され激化する傾向があり、制止時に事故や暴力など不適応の契機となり、FTLD の対応困難な BPSD のひとつである。しかし食事場所の設置、配膳形態や給仕方法の修正により、盗食や掻き込みや丼飯づくりを予防し、安全で満足度の高い食事習慣を再獲得することが可能であった。また、病初期から取り組むことのできた学習ドリルは進行期にあっても患者の関心引きつけ、冷蔵庫の食べ漁りといった深夜の BPSD 出現時に有効な抑止効果を持ち、それを利用してベッドへ再誘導を果たした。病初期から学習ドリルに従事することは、認知機能面での廃用を予防するのみならず、進行期の BPSD 出現時に、それを抑止する活動としての機能が期待できる。こうした個別対応により、口唇傾向にもとづく危険度の高い BPSD に対しても、新たな習慣の獲得の可能性が示唆された。

E. 結論

FTLD では、進行期の口唇傾向にもとづく食行動異常に対しても、高い学習能力とその行動特性を利用し、安全で適応的な行動への修正が可能な場合がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

(小森担当分)

1. 谷向 知. 通所サービスやリハビリテーションに関する説明。「実践認知症診療：認知症の人と家族・介護者を支える説明」,(繁田雅弘編), 医薬ジャーナル社, 大阪, pp65-69, 2013

2. 小森憲治郎, 谷向 知. 認知症によるコミュニケーションの障害に対する評価のポイント、言語治療の組み立て方や技法について教えてください。失語症 Q&A 検査結果のみかたとリハビリテーション (種村 純編), 新興医学出版社, 東京, pp176-179, 2013

3. Ikejima C, Ikeda M, Hashimoto M, Ogawa Y, Tanimukai S, Kashibayashi T, Miyanaga K, Yonemura K, Kakuma T, Murotani K, Asada T. A multicenter population-based study on the prevalence of early-onset dementia in Japan: Vascular dementia as its prominent cause. Psychiatry and Clinical Neurosciences (in press),

4. 小森憲治郎, 北村伊津美, 園部直美, 谷向 知. 意味性認知症と語義失語. Clinical Neuroscience 31 (7) :791-795, 2013

5. 原 祥治, 小森憲治郎, 坂根真弓, 谷向 知. FTLD の食行動異常に対するルーチン化

療法の試み. 高次脳機能研究 33(1):127,2013

6. 小森憲治郎, 原 祥治, 谷向 知, 数井裕光. 意味性認知症の臨床症状: BPSD とその対応を中心に. 特集「前頭側頭葉変性症と類縁疾患の基礎と臨床」. 老年精神医学雑誌 24 (12):印刷中

2. 学会発表

1. 北村伊津美, 谷向 知, 福原竜治, 上野修一. 発症後 10 年を経過した進行性非流暢性失語の一例. 第 27 回日本老年精神医学会 2013. 6.4-6 (大阪)

2. 小森憲治郎, 原 祥治, 豊田泰孝, 坂根真弓, 谷向 知. 側頭葉型 Pick 病の常同行動・食行動異常発生のメカニズムとその対応. 第 28 回日本老年精神医学会 シンポジウム 2 BPSD の発現機序の解明と治療法; Up to date 2013. 6.4-6 (大阪)

3. 小森憲治郎, 原 祥治, 豊田泰孝, 谷向 知, 北村伊津美, 池田 学. 意味性認知症例に対する語彙学習ドリル: 進行期の在宅介護上での意義. 第 37 回日本神経心理学会総会 2013.9.12-13 (札幌)

4. 小森憲治郎, 豊田泰孝, 谷向 知. 原発性進行性失語 (PPA) の国際分類と FTLD: 進行性非流暢性失語 (PNFA) と意味性認知症 (SD). 第 32 回日本認知症学会学術集会 シンポジウム 9 「前頭側頭葉変性症」2013.11.8-10 (松本)

H. 知的財産権の出願・登録状況

1.

2. 特許取得

特になし

3. 実用新案登録

特になし

4. その他

特になし

